

# 鉾屋町 町内会だより

## 盛岡弁の昔話っこ

花田陽子さん作・語りによる「下町のお花ばあちゃん」の盛岡弁で語る昔話っこが、2月13日に大慈清水御休み処で行われましたので、伺ってきました。



賜松園、南昌荘、石井県令私邸を語る「杜陵の三邸」、開運橋の歴史と逸話「開運橋物語」、そして予定されていた「十六羅漢」を、今年は丑年だからとい

不定期発行  
発行者 鉾屋町町内会  
編集/文責/撮影 桂 汎用工房 脇田 桂一郎  
印刷 小松総合印刷株式会社

うことで急遽変更して、千手院の撫でペコの由来「なでべこの話」の三話となりました。

当日は花田さんの話を記録に残すとのことで、多数のカメラや録音機材が配置され、会場はやや緊張気味。私も邪魔をしないように撮影します。



花田さんの声は実に聞き取りやすく、方言ということを意識しなくても意味と雰囲気伝わってきます。

三話が終わった後、会場の皆さんのアンコールもあり、差し替えになった、らかな児童公園の十六羅漢の歴史「十六羅漢」も語ってくださいました。



元々出身が岩手でない私にとつては、「盛岡弁を知る」「盛岡の歴史を知る」ということになり、二重の意味での勉強にもなりました。



## みずき団子を作ろう

盛岡医療福祉スポーツ専門学校 社会福祉学科さんと、もりおか町家物語館さんの企画で、みずき団子作りを体験する「だんごの森」が2月14日に行われました。



みずき団子は五穀豊穡などを祈って、木の枝に紅白の丸い団子を飾る小正月の行事です。

地元の方は「ああ、みずき団子ね」と分かるみたいですが、私は最初に聞いたとき何のことか分からず、大辞林を引いても載っていませんでした。調べたら「みずき団子」は岩手での呼び名で、全国的には「もち花」などと言われているようです。そういうえば神社でよく見た覚えがあります。



団子作りの主な会場は佐藤青果店さんです。社会福祉学科の大富和弘先生とその生徒さんたち、そして佐藤好春さんが作業を進めます。上新粉をお湯で練っていきます。



形ができたものをかまどで沸かしたお湯で茹でていきます。



練上がったものを団子状に丸めていきます。この辺りから一般参加の親子さん方も合流し、様々な団子を作ります。



どうやってつけるかというと、団子を枝に突き刺します。

茹で上がった団子、この時の色が実に鮮やかできれいです。できた団子を町家物語館まで運び、用意してあったミズキや針金のオブジェにつけていきます。



参加した皆さんは竈を初めて見る方も多く、茹でるだけでも一つのイベントのようでした。



ほんのりと色付いた団子が木々に実る様は、春を待ち望むようにも見えます。この号が出る頃はすでに3月ですので、その足音も聞こえているでしょう。



団子だからそれが正解なのか。こういうのは枝に餅を巻きつけるのかなと私は思っていたので、ちよつと意外でした。

### 交通指導員より 反射たすきの寄贈

大慈寺学区・杜陵学区を担当する交通指導員第3班の藤田班长から、大慈寺小学校の新入生に、夕暮れや夜間の安全を守る「反射たすき」が寄贈されました。



歩道の整備が難しい地区で、反射材やLEDライトで歩行者の存在を知らせることは、交通事故防止に有効と考えられています。もう生徒でない方も活用を検討してみたいかがでしょうか。

### 防災講座に 参加してきました

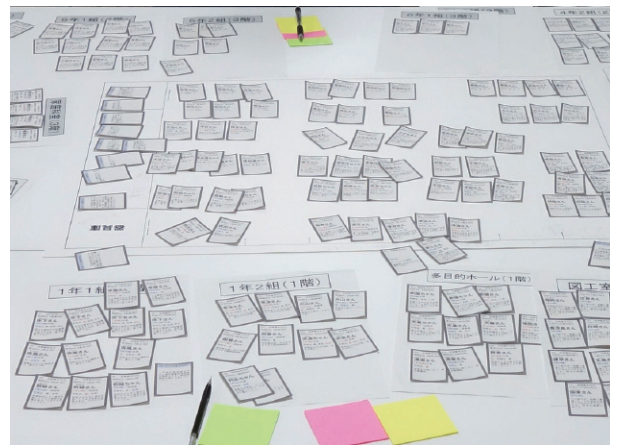
令和2年度盛岡市中央公民館 防災講座が2月11日に行われ、鉈屋町町内会として参加してきました。

講座1は平成30年に配布された盛岡市防災マップの見方と留意点というもの。盛岡市の危機管理防災課が解説を行いました。

講座2は、もりおか復興支援センターによる「避難所運営をゲームで体験」というものでしたが、これがなかなか凄かったです。

要は避難所の運営を、またまた受け持つことになってしまった人達が、刻々と変化する現場をどう乗り切るか、という体験シミュレーションです。

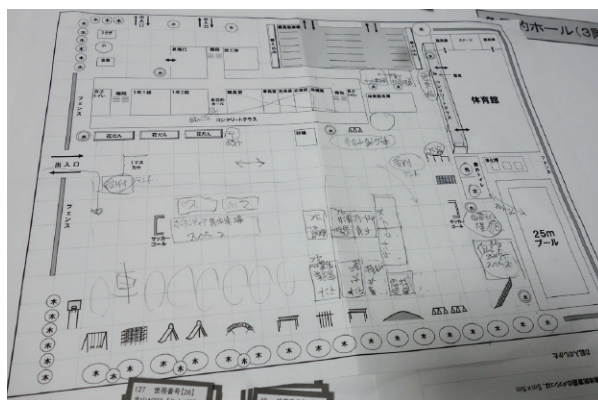
運営の参加者は5〜6人、避難所は小学校、大地震により停電・断水、季節は真冬という状況設定。次々と訪れる避難者はどう受け入れるかを素早く判断する必要があります。



体育館の図面と校舎の教室図面があり、そこに避難者を模したカードを配置していきます。

カードの大きさは避難者1人に必要とされる面積になっており、重ならないよう図面の上に並べなければなりません。ただ重ならないだけではなく、通路や物資のスペースを考えたり、家族や同じ町内の方をまとめたり、高齢者は？病人は？等、工夫が要求されます。増えるカードをひたすら並べていくのは「逆・百人一首」といった感があります。避難者は進行役の方がどんどん送り込んできます。運営があ

たふたしていても、容赦なく人数が増えていくのです。問題を抱えた方も多く、ペット連れ、人工透析が必要、外国人で言葉がわからない等々。更に様々なイベントも起こり、炊き出しの場所を作れとか、避難者から要望・苦情がでたり、そういった事をリアルタイムで処理していくのです。



校庭内の配置も考える必要があります。

面白いことに、こんな状況下でも一人一人の個性？によって自然に役割分担ができていきました。全体を見ながら指示していくリーダー的な人。避難者のデータを読み込んで配置を考える

人。イベントや苦情を処理していく人。見落としや忘れてることがないかチェックする人。ちなみに私はいつの間にか「苦情処理係」になっておりました。

終わった後は反省点などを出し合った後、各グループの発表、意見交換を行いました。

ちよつと精神的にはきつかったですが、これは非常によくできているゲームです。一度体験しておく価値はあると思います。

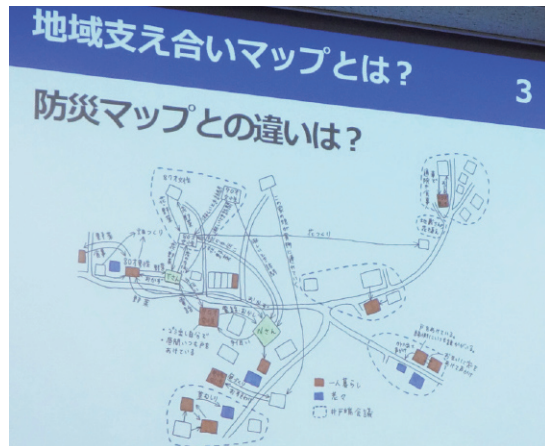
ゲームの正式名称は「避難所HUG」、開発したのは静岡県で、県の授産施設で制作・販売しているそうです。

講座3は盛岡市社会福祉協議会による「支えあいマップの作成と活用」。

個人情報保護やらが厳しくなり、個々の人のことが分かりにくくなっている中、緊急時に孤立したり、支援が必要な方をどうやって知るか、ということ地域住民で共有しようという目的のようです。

情報のレベルで言えば「世間話」

「井戸端会議」のようなものを集め「あの方は一人暮らしだけど、〇〇さんとは親しい」とか「この方は足が悪いから避難のときは大変かも」といったことを地図上で可視化してということ。



ただしこれは実行できても、分け隔てなく全ての人を情報化できるかどうか疑問が残ります。集落全員が顔見知りみたいな場所ならいざ知らず、都市部に近づくほど問題が出てくるのではないのでしょうか。

「住民での共有」ですから、皆さんにその地図を配るわけで、収集した情報を公開するかの判

断は特に難しくなってくると思っています。他人との距離を置きたい人、集合住宅の扱い、世代間の格差、感情的な面等々、配慮すべきことは多そうです。

密度の高い1日でした。本来であれば、これらの講習は3日間に分けて行うものを「防災意識が高い方が来ると予想」したので、1日でまとめてすることにしたそうです。あとで聞いた話によると町内会長クラスの方がたたくさんいたとか。

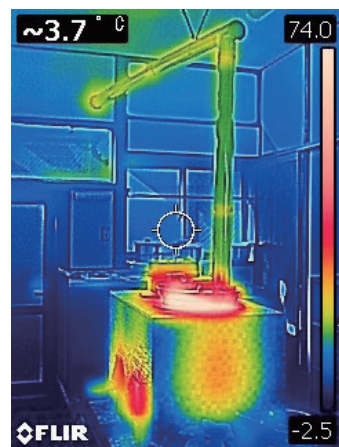
非常事態は起こらないに越したことはありません。でも、起きてしまったら何もしない訳にはいきません。考えることが少し増えた気がします。

## 編集後記

わざわざ「編集後記」と名乗っているのですから、たまには記事に関するお話をいくつか。

1 佐藤青果店の<sup>かまど</sup>竈の温度。サーモグラフィー(赤外線

温度分布を可視化するもの)で撮影。白が温度が高く、青は低いところ。本体はレンガでできているので、外側はそれほど熱くなりません。思ったより煙突の温度が低く、熱効率が良いのかと思いました。



## 2 苦情処理係の奮闘。

避難者より「煙草を吸う場所がほしい」↓「元々小学校ですし、非常時ですから敷地内全面禁煙にしましょう」

役所より「2日後に総理大臣が被災現場の視察に訪れます」

↓「明後日?、そんな先のことはいいからほっときましょう、今起きてることが優先です」

感覚的には1分に1回ぐらいこういった判断をしなければならなかったのですが、こんなのでよかったですでしょうか。(桂)